

姦の忍法帖

山田風太郎



文春文庫



文春文庫

定価はカバーに表示してあります

姦の忍法帖

183-1

1977年2月25日 第1刷

著者 山田風太郎

発行者 檜原雅春

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3 千102

TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが、小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan

文 春 文 庫

姦 の 忍 法 帖

山 田 風 太 郎



文 藝 春 秋

目次

姦かんの忍法帖にんぼうちよう

五

胎たいの忍法帖にんぼうちよう

七二

策さくの忍法帖にんぼうちよう

一〇六

転てんの忍法帖にんぼうちよう

一二八

牢ろうの忍法帖にんぼうちよう

一七〇

しめ
の忍法帖にんぼうちよう

一九八

姦かんの忍法帖にんぼうちよう

一

「瓢箪ひょうたんから駒」という言葉がある。意外また意外という意味だが、小事から大事を生むという語感をも含んでいる。これは「駒から瓢箪」の物語だ。つまり、天下国家から、小さな悲喜劇を呼んだという。――

「臣主の利は相ともに異なるものなり。主の利は能ありて官に任ずるにあり、臣の利は能なくして事を得るにあり、主の利は労ありて爵禄するにあり、臣の利は功なくして富貴なるにあり、主の利は豪傑の能を使うにあり、臣の利は朋党の利を用うるにあり。……」

白哲はくせきで、小柄ながらでっぷり肥って、いかにも才人らしい総髪そうかみの男はこう読んだ。

「つまり主君は、有能で功労がある豪傑ばうてきを抜擢はつてきし、厚く賞するのが狙いでござるが、臣下にとつては能も功もなく、仲間とくんで私利をはかるのが倖せなのでござる。主君は国家と申してようござろう。臣下は官僚と申してもようござろう。まことに能力と努力だけを買われるなら、役人

はたちまち悲鳴をあげて主をそしるようになります。世に明君の評あるときは、必ずや官僚は無能にして爵禄され、私利をたくらんでおるものと見てよろしい。――」

じろりと將軍の傍に坐っている老中松平伊豆守を見た。

講義しているのは、由比張孔堂正雪である。テキストは「韓非子」である。

「あたかも浮氣しておる亭主にかぎって、女房をはめたたえるようなものでござる」

こんなはずではなかった。――牛込榎坂に住む巷の軍学者ながら、大名旗本をもふくめて門弟三千と称する人物だから、その噂をきいて將軍が招いた。「軍学者」という以上は孫子か呉子の講義でもするのかと思っていたら、あにはからんや「韓非子」を持ち込んで来て、真っ向上段から君主論、ひいては政治論をやりはじめた。

しかし、才氣縦横、警拔痛絶な皮肉をさしはさんで、なかなか傾聴させる。「さすがは。――」と、そこに陪席していた十人の大名もうなずき、改めて張孔堂に入門の意欲を起したほどであった。

「かくのごとく、主君国家と臣下官僚の利害は一致いたしませぬ。あつてはならぬことで、かついかにも一致するようと思わせるのが役人の手管でござるが、いつの世でも真相は一致せぬのが常態でござる。あたかも矛と盾のごとし」

といって、眼をあげて、

「恐れながら上様には、矛盾の故事を御存じでござりましょうや」

「矛盾、という言葉は知っておるが。――」

將軍はいまいな声を出した。彼だけは少々たいくつもしていた。

「いや、好都合にも、その故事は韓非子にあるのでござります。では、ついでに一つ」

と、書見台の韓非子をめくって、また読み出した。

「楚人、盾と矛を売る者あり。これを褒めて曰く『わが盾の堅きこと、よく通すものなし』と。またその矛を褒めて曰く『わが矛の鋭きこと、物に於て通さざるなし』と。或る人曰く、『子の矛を以て、子の盾を通さば如何』と。その人、応ずる能わず。それ通すべからざる盾と、通らざるなきの矛とは、分を同じくして立つべからず。……」

「天下一の兜と、天下一の剣との関係じゃな。……」

「左様でござる。よくお分りになります。君と臣とは、あたかもこの矛と盾同様にして、……」

「出羽」

と、ふいに將軍はかえりみた。

多少注意力散漫症の気味もある人だが。――

「思い出したが、その方の家に羅馬の兜なるものあり、おそらく天下一であろうと申したことがあったな」

「されば。――」

と、天童藩天童出羽守は一揖して、すぐに昂然と頭をあげ、

「いまは日本風の兜には作り直しましたなれど、元来はかの支倉六右衛門常長が羅馬より持ち帰りましたる南蛮兜、これまでいくたびか刀を以て試し斬りをいたしましたところ、刀はすべて

折れ、兜にはかすかにその痕が残るのみでござりまする」

「熊野」

と、將軍はまた呼んだ。

「そういえば、その方の家にも破倭はわの劔なるものあり、これまた天下無双であろうと申したこと
があつたな」

「されば。——」

と、熊野藩那智熊野守もお辞儀して、すぐ誇らかな顔をあげ、

「これは例の高麗陣の折、日本の水軍をさんざん悩まし、朝鮮の守護神ともいわれた李舜臣の帯
びたる刀と申し伝え、いつぞや二つ胴を試しましたところ、二つ胴はおろか、台となしたる櫓
の厚板をも紙のごとく斬り離したる身ぶるいするほどの名刀でござりまする」

「ほう。……羅馬の兜に破倭の劔。……」

韓非子とともにどこかへ放り出されていた正雪が口を出した。

「是非それを拝見いたしとうござるな」

「わしも見たい。江戸にあるか」

と、將軍がいった。

「は。——」

「近う、それを持って登城せい」

「は。——」

「ただ見るだけでは面白くない。ついでに、その破倭の剣を以て羅馬の兜を斬って見せい」
天童出羽守と那智熊野守は顔見合わせた。

「剣と兜の、いずれが二つになるか。……矛と盾じゃ」

「恐れながら」

と、いままで黙々としていた松平伊豆守がしずかに將軍の方に向き直った。

「そのような儀、思いとどまられませ。いずれに傷がついても悪しゅうござりますれば。——」

「傷がついて悪いような剣や兜が何になる？　そもそも斬るために剣はあり、護るために兜はあるのではないか。世の常の宝とは意味が違う。そちらしゅうもない愚かなことは申すな、伊豆」

「そこがすなわち、君臣矛盾論。……」

と、正雪がまた得たりや、とさし出口するのにとり合わず、

「ついでだからきく。その他の諸家にも何ぞ自慢の武具があるか。兵法乃至兵法者でもよいぞ。いずれ武勇を以て聞えた家柄、何もないとはいわせぬぞ」

將軍は突然頭に浮かんで来たアイデアにみずから膝を打って、眼をかがやかしてそこに居流れた十人の陪席大名を見まわした。

かくて、兜をあげた天童出羽守と、剣を持ち出した那智熊野守以外に。——

五条藩主、五条大和守がやはり刀。

筑摩藩主、筑摩信濃守が鎧。

やはり信濃の更科藩主、更科諏訪守が弓。

信夫藩主、信夫岩代守が槍。

ここらあたりまではまあオーソドックスであったが、次のものはやや異風であった。しかし、それぞれの大名は沈思の結果、きつと首をたてて披露したのである。すなわち。――

天草藩主、島原天草守が盾。

出雲崎藩主、出雲崎越後守が鎖繩。

信楽藩主、信楽近江守が十手。

終りの方の二つになると、ほかの大名とちがって、家宝というより武術にちかい匂いがあるが、最後の一人に至っては、これはもう完全な人的資源といえた。

剣山藩主、剣山阿波守が力士。

つまり彼は腕力乃至筋肉を出品したのである。

「ふむ。そうきけばいいよ以て見とうなる。いずれも、見せい」

といって、將軍はちよつと考えこんだ。

あまり回転のよくない將軍の脳髓にそのときゆらめいていた内容を、正雪は敏速明哲に把握した。

「組合せでござりまするか。……まず攻撃と防禦に分けます。攻撃は剣と槍と弓、防禦は兜と鎧と盾。――繩、十手、そして力士と相成りますとこれは攻撃用か防禦用かいささか判然とせぬところもござりまするが、こだわらずに以上を大別いたしますれば、剣対兜、槍対鎧、弓対盾、もう一つ剣対十手、そして鎖繩対力士、などという組合せはいかがでござりましょう」

「よからう」

と、將軍はいった。大名たちの返答はまたず、もはや事は決したという顔つきである。

ところが、——さて、それらの武具の所在をききただしてみると、最初の天童藩の剣と熊野藩の兜はたしかに江戸藩邸に置いてあり、出雲崎藩の鎖繩とその術者、剣山藩の力士も江戸にあったが、あとはことごとくそれぞれの国元にあるというのだ。

それは早飛脚を出していそぎ取寄せることにして、自分の発想に昂奮してせっかちとなった將軍は、数日のうちにとりあえず、すぐに間に合う四藩の誇るべき武具乃至人を御前に披露することを命じた。

「これは拙者、日常指南いたしまする大名旗本衆への教授上の参考とも相成りまする。なにとぞ拙者にも陪観の榮を賜りたく。——」

と、由比正雪はひぎを乗り出した。

苦い顔をしていた伊豆守が、きつとなつて將軍に声をかけようとしたが、すでに將軍は、「よからう」

と、意にも介さぬ風でいった。

かくて瓢箪から駒がまず出た。江戸城に於ける巷の軍学者由比張孔堂正雪の「韓非子」講義から、まず剣と兜、鎖と筋肉という二つの御前試合がくりひろげられることになったのである。

二

……真っ白な肉が二つに分かれて、その合わせ目から毛がはみ出している。そこに指をさし入れた。

肉はびったりとはさんだ。微妙に吸いつきしずかにもみこむようにうごめく。擦りつづける。やがて、白い肉がしずかに桃色に染まり、ぬめぬめと濡れてひかってくる。

「まだ……動きが足りぬ」

指をさし入れたまま男はいった。眼をとじて、じっとその感触を味わっているようだ。

「まだ……まだ……まだ未熟だ。そうだ、廻すように、それも螺旋らせんのように。……」

さらに数分たった。それでなくとも梅雨どきの湿潤な空気が、さらにねっとり濃厚になったようであった。

「よし！」

といって、男は女のわきの下にはさんでいた指をぬいた。

女は片肌ぬぎになって、むき出しになった乳房の一つを反対の手で押えていたが、二の腕とわきの下の筋肉をわずかに動かすというだけの労力なのに、こちらの方が息はずませて、乳房を押えた手が大きく起伏していた。

「ふう……」

と、しかし男も、ちょっと吐息をついた。

「一番はそれくらいでまあよからう。……二番、見てやろう」

と、からだのむきを変え、手枕でそこにごそりと寝そべった。

別の女がにじり寄った。唇をすばめて、ふっと吹く。すると、粟粒ほどの泡が、いく粒か吐き出されて、空をただよい、徐々に落ちていった。それをふりかえりもせず、女は寝ている男の耳に口を寄せた。まるで何かささやいているようだ。

事実、女の口からは微かな声もれている。声というより糸のように細い旋律だ。女は舌の先をとがらせて、男の耳へさし入れながら、その舌にのせて小さな唾液の気泡と、そしてそばに寄らなければ聞えないほどの音波だが、なまめかしいあえぎを送りこんでいたのであった。

「まだ……舌のまるめかたが足りぬ」

眼をとじたまま男はいった。

「いま少しまるめると、声にもまるみが出るのではないか？」

数分たった。

「よし。……春の琴を張れ」

すると女は、男から口を離れた。それっきり、やや紅潮した顔ながら、坐ってじっと男を見まもっている。

男は、まだ眼をつむっていた。女は離れたのに、何やら耳をすませて聞いている風である。味わっている顔つきでもある。やおら、襟にさした楊子をぬいて、その耳をほじった。

「二番、まあよかるう」

といつて起き直った。

この座敷にいるのは彼と二人の女だけではない。もう二人、やはり美しい女が坐っていて、いまの妖しい儀式を見学していた。男の呼称を以てすれば三番、四番とでもいうべき女であろうか。あきらかに三番目の女は、三番……と呼ばれるのを待つかのように、ちよつとひぎをにじらせた。いつもなら、その順番なのだ。が男はなお楊子で耳をほじりながら、破れ障子の間から外にけぶる銀色の霧雨を眺めている。

「何かあったのですか、兵四郎さま」

と、四番の女がいった。

「いつものあなたとはちがいます」

男はうなずいて、楊子を灰吹きに捨ててこちらに顔をむけた。蒼白い、凄いような男だが、きれながの眼に皮肉のひかりがあり、妙に肉欲的な口辺に童子っぽい笑いがある。

「ちと面白い話をきいたのよ」

といった。

「奇妙な御前試合の話をな。……出雲崎藩の曾宮来助ちみすけという男から」

そして彼は、ちかく將軍の御前で、剣と兜、鎖繩と力士の試合が行われることを話し出した。

ここは駿河台甲賀町の甲賀組の組屋敷。男の名を甲賀兵四郎という。組頭すなわち甲賀組の首領の倅である。二十八歳。

彼はここで何をしていたのか。――

彼は快楽をかねた訓練をしていたのである。

兵四郎はもともと相伝の家業には相当熱心な男で、いま公儀隠密組のうちで主流を伊賀組に占められ、甲賀組は傍系となっているのに大不平をもち、公然公儀を批判してはばからぬほどであったが、二年ほど前から突然ぐれはじめた。

むろん、正体はかくしているが市井で肩で風を切って歩いている旗本などをつかまえて、からかって、手ひどい恥をかかせる。廓へいって遊女に――千軍万馬の遊女があとで首でも吊りたくなるようないたずらをやってのける。その詳細をここに物語る余裕はないが、とにかくそれがいちどばれかかって、老父から手討ちを受けんばかりの叱責を受けて、以来さすがに鬱を外部ではらすことはやめた。

その代り、甲賀組内部で、甲賀組の女相手に、自称「忍法修行」に耽るようになった。

門外漢から見たら、ただ盛大に淫行をほしいままにしているとしか思われない。自暴自棄の女狂いとさえ見えるところもある。もともと軟派の傾向もあり、美男でもあるので、女たちも嬉々としてそれに応ずるありさまを見て、甲賀者の中で苦々しげに老父にこれを忠告した者があった。一年前から中風の気味のある父が、ろれつのまわらない口で叱ると、兵四郎は平然として答えた。

「くノ一の修行でござる」

くノ一とは女という字を分解したもので、女そのものの隠語でもあるが、また忍者の世界では女を利用する忍法をも意味している。スパイ行為に女人の有用なことは論をまたず、甲賀流でも